

第 I 部 防災講演会

講師：防災士・新潟県自主防災コーディネイター 尾身 誠司

「災害列島日本 ～私たちはどうすればよいのか～」

私は昭和39年に消防署に入り、その後新潟地震が起こった時防災に対していろいろと考えるようになりました。その後は長い間、中越地震が起きるまで地震にあうことはありませんでした。

また阪神淡路大震災が起こった時、確かに大変な被害でしたが消防職員として十日町市、新潟県として現地に応援に行くということも特にはありませんでした。しかしこの地震が、現在までの災害の大きな歴史の始まりだったのではと感じています。今回の講演では魚沼市で講演会をしているのに世界の話をするのもおかしな話ですし、日本全体の災害について話をするのも大変なので、同じ豪雪地である十日町市と魚沼市の共通の話題から考えてみようということで話をさせてもらいます。

最初に話しましたように、昭和39年に消防に入りました。消防は救急、火災、救助が市の仕事ですが、防災については自然災害になるので、地震や風水害などに対する防災の役割というのは、自治体が行わなければなりません。

魚沼市はそうではなくなりましたが、広域消防を行っている自治体というのが現在でもあり、十日町市も現在そうです。広域自治体での消防というのはメリットもありますがデメリットもあります。

防災については、各自治体の首長が責任を負うことになっていますので、例えば6つの市町村であれば、6人の首長がそれぞれの自治体に責任を持ってやることになり、力を入れることができます。しかし自然災害への対応については自主防災組織をつくろうとか、自主防災体制を強化ということになり、その役目は市町村の役目になるのです。消防についてはそれぞれの首長がいるので、防災について指導はするけれども積極的なことはやらないというのが実際の現状です。広域的な地域において均等な防災体制が行われたいというのがデメリットではないかと思います。

魚沼市の場合は消防署が一つになりましたので、市の防災体制というのが消防としても力を入れられるのではないかと思います。そのあたりは羨ましいと感じています。逆に言えば消防署長は、消防と防災両方を考えなければならぬので大変かなと思います。

このように広域的な消防体制というのは、消防についてはそれぞれの自治体が力を入れていましたが、防災となると決して疎かにしてはいたわけではないと思いますが、結果的にそうってしまったと感じています。

何故かと言うと、十日町市では自主防災組織の組織率が98%ありますが、これは単に

組織率なので果たしてそれが本当に機能するのかどうかということが問題です。

中越地震の時には、十日町市には自主防災組織はほとんど立ち上がっていませんでした。私は平成15年に退職し、その翌年に中越地震が起きました。消防職員に在職していた当時から、地域に自主防災組織がないのを疑問に思っていたので、退職後自主防災会を立ち上げるための活動をしようと思い、平成16年の9月にNPOを立ち上げて活動を始めました。

防災のNPOということで、活動自体はボランティア的なものだけでも、地震が起こった後のボランティア活動ではなく、地震が起こる前に備えるためのボランティア活動をしようというのが活動の主な目的としていました。

町内や自治会、あるいは老人会などの団体に声をかけて、災害が起こった時、特に地震が起こった時にどうしたらいいかを考えてもらうには、やはり自主防災組織を立ち上げて、自分の命は自分で、地域は地域で守るということをやっていないと大変なことになるという説明をしなければならぬという話になりました。

このような内容の説明を地域で行い、自主防災組織の立ち上げに寄与していきたいと思いましたので、当時の十日町市の総務課長に相談しまして、平成16年の秋頃から地域と一緒に回って説明会を行い、自主防災組織の立ち上げを行っていかうと思っていた矢先に中越地震が起こりました。

そこでこれは地域で話をするよりも、実際に地震が起こったことで危機感が高まり、自主防災組織を立ち上げようという気運が高まりました。

また中越地震後、災害復旧のために復興基金がもらえることになりました。当初は事業の3分の1程度が補助金としてもらえる予定でしたが、100%もらえることになり、そのためには地域に自主防災組織を立ち上げるという規定がありました。

そのため被災地の十日町市や長岡市、小千谷市や南魚沼市、もちろん魚沼市で自主防災組織を立ち上げないと補助金をもらえないということで、自主防災組織が作られ始めました。

つくられたことはいいのですが、果たしてそれが本当に自主防災組織として機能するのか、しているのかという気持ちが今でもあります。

現在十日町市と協力して、地域の自主防災組織のスキルアップを図ろうということで活動している。その内容についてと、現在までに様々な災害が起こっていることを、パソコンを使って説明させていただきたいと思います。

「災害列島日本 ～私たちはどうすればよいのか～」という題目がついていますが、結論から言うと自然災害、特に地震を予測したり防いだりすることはできません。そうなる、起こった時のために備えをするしかありません。個人、地域、行政それぞれの単位で備えるしかできることはありません。言うのは簡単なのですが、実際に行うことになると難しいです。またこのような講演会で話をしてそれでおわってしまえばよいのですが、話

を聞いて実行してもらわなければ意味がありませんし、実際にはほとんど実行されません。

本来であれば今回のような講演会ではなく、地域に入って細かく話しをして、実際にやる気にさせることが私たちの役目であり、今この場には各地域に代表者の方々が来ていますが、話を聞いて終わるのではなく地域に帰って実行し、備えをしていただきたいと思えます。

では実際に自分の命は自分で守らなければならないとしたら、どのような備えをしたらよいのでしょうか。例えば地震が起こって、箆笥の下敷きになった人がいるが呼吸をしていない、その時人工呼吸などの心肺蘇生法を知らなかったらその人は助からないわけです。道路が被害を受けていれば救急車はすぐには来ません。

災害が起こった時、どのような事態になるかわからないので自分の命は自分で守る、家族の命は家族で守る、という意識を持ち心肺蘇生法や止血法などの技術や知識を身につけておくことが大切です。心肺蘇生の道具としてAEDがありますが、あれはあくまで補助的な役割でしかないのです、それと並行して心臓マッサージ、人工呼吸を行わなければ助かりません。機械があるからといって、安心してはいけません。

また地域は地域で守るという意識も必要です。近年、絆を大事にすることが叫ばれるようになってきました。都会に限らず、十日町市や魚沼市のような地域においても、絆というものが希薄になってきました。これを見直し、絆を深めて地域の防災に役立てていくことが大切です。昔であれば自主防災組織は必要ありませんでした。絆、向こう三軒両隣のつながりで互いに助け合ってきたからです。特に規則が無くても、問題ありませんでした。

個人、地域はこのようにして守ればいいですが、公助の部分はどうか。公助については、あまり考えすぎなくていいと思います。公助で災害に対して備えようとする、どうしてもハード面を考えなければならなくなります。ハード面を充実させるためにお金をどんどん使うことは、大変難しいです。

では逆にソフト面を充実させようと思ったら、各地域の自主防災組織のスキルアップを図ることになります。これについてアドバイスや支援を考えることが大切だと思います。

公助というのは災害が起こる前よりも、起こった後の復旧・復興に力を入れられているのが現状です。確かに起こった後に力を入れるよりも、起こる前に力を入れろと考えるかもしれませんが、そうではなく起こる前は自分たち個人や地域で備えをする。それが最終的な結論なのではないかと考えています。

主な防災対策としては、下記のように分かれています。

- 国：災害対策基本法 中央防災会議（自衛隊）
- 県・市町村（警察・消防）：地域防災計画 市町村等防災会議
- 地域防災力：集落（地元消防団・自主防災組織）
- 家庭：自主防護・防衛
- 個人：自分の命は自分で守る「てんでんこ」

地域防災力として、消防団と自主防災組織が協力することは非常に大切です。阪神淡路大震災の時、淡路島の旧北淡町では自衛隊・警察が現地に入って行方不明者を探す前に、地域住民が協力して安否確認や救出を行い、非常に早い段階で救助を行ったので一人も亡くならなかったそうです。この時から、地域防災力が見直されるようになりました。このように地域住民が協力して災害を乗り越えたという実績があります。

また家庭内の自主防護・防衛として、耐震工事や家具の転倒防止などを日頃からしておくことも必要です。

後は、「てんでんこ」の意識を持つことです。これは自分勝手に、という意味があるそうです。津波が起きたら「てんでんこに逃げろ」というのが、東北地方の先人たちの教えだったそうです。最初これを聞いた時は、人情の無い冷たい教えだと感じました。津波が来ても人のことは気にせず、自分だけ助かればいいという意味だと思ったからです。しかしそうではなく、何かあった時自分の命は自分で守るということも大事だが、現代のように家族がバラバラな場所で生活していることが当たり前の時代においては、今自分がいる場所から安全に逃げられる方法を考えておきましょうということなのだそうです。魚沼市であれば、津波はありませんが地震は起きます。たまたま休日で家族が家にいるならいいのですが、平日で会社や学校にそれぞれ行っている場合、それぞれがそれぞれの場所で安全確保をすることがいかに大事か、これを「てんでんこ」というのです。これは家庭や職場、学校でそれぞれ決めておくことであり、これを決めておけば災害に対して安心していられます。自分が無事なら、家族も無事でいられると考えることもできます。

災害が起こった後、家族などの安否確認を行わなければならないと思いますが、これがまた大変です。現代であれば携帯電話の災害時のサービスなどがありますが、知識として知ってはいても、緊急時にそれをきちんと使えるかが問題です。なので「てんでんこ」という形で、家族の安全を確保しておくことが大事ではないかと思います。

十日町市も魚沼市も、地震の原因となるのが内陸の活断層です。十日町市であれば十日町断層、魚沼市であれば新発田－小出構造線がそれに当たります。

また今一番心配されているのが、長岡平野西縁断層帯という断層で、30年以内に地震が起きる確率が30%以上とされているそうです。

次に災害列島日本ということで、主に新潟県で起こった災害について紹介します。

- ・台風23号による信濃川増水（平成16年10月20日）
- ・平成16年新潟・福島豪雨【7.13水害】（平成16年7月13日）
- ・新潟中越地震（平成16年10月23日）
- ・新潟中越地震翌年、平成17年の豪雪
- ・新潟中越沖地震（平成19年7月17日）
- ・平成23年の豪雪
- ・長野県北部地震（平成23年3月13日）

○平成23年7月新潟・福島豪雨について（十日町市報から）

・降雨状況

累計雨量 27日午後3時からの72時間・・・493mm（市街地）
565mm（八箇峠）

1時間最大雨量・・・29日午後8時～9時 120mm（市街地）
7時50分～8時50分 121mm（小泉）

過去における7月の時間最大雨量・・・34mm

・人的被害

死者・・・1名 行方不明・・・1名 負傷者・・・3名

・建物被害

床上浸水・・・99件 床下浸水・・・623件

・避難所 10箇所 32世帯 170人
最大時 11箇所 266人

地域で災害に備える方法として、

○自主防災組織の整備

1. 自主防災をコミュニティ活動の核に
自分たちの地域は、自分たちで守る

自助：災害から命を守る

互助：お互い助け合う

協働：地域で活動する

2. 自主防災組織の防災計画

十日町市自主防災組織支援事業を活用

「地域防災マップづくり」DIGをすることで地域を知り、安全・安心なまちづくりを考える。

十日町市では現在、協働まちづくり事業の一環として、防災組織を支援しようということで十日町市自主防災組織支援事業を行っている。地域の人達に防災マップづくりを行ってもらうことで地域を知り、安全・安心なまちづくりを考えてもらおうとしています。地域の危険な場所を知り、対策を立てることで安全な地域をつくりましょう、ということをや

っています。

最後に全体のまとめとして、

○危険予測と自己責任

- ・自分の命は自分で守る（自己責任）
 1. 救急法の習熟（心肺蘇生・止血・やけど手当て）
 2. 消火器の設置と消火方法
 3. 住宅用火災警報器の設置
 4. 家具の転倒防止
 5. 耐震診断と改修（補助金制度の活用）

・家族は家族で守る（自己責任） 「てんでんこ」の意味

・地域は地域で守る（絆）

1. 地域を知る（過去の災害・危険・財産等）
2. 安心・安全な地域をつくる
そのためにDIG（防災ワークショップ）の開催

・公助には限界がある（復旧・復興が主体）

DIG（防災ワークショップ）の内容として、新潟中越地震が10月ではなく豪雪時に起こっていたらどうなったか、ということを考えてもらったことがあります。皆さん真剣に考えますし、他のグループの発表も真剣になって聞きます。そうして、じゃあ災害に備えるにはどうしたらいいのかという話になると、防災訓練や講習が必要だということになります。そうすると、消防署に任せた消火訓練や救急講習だけでは駄目だと住民の方々は考えるようになりますし、自分たちで道具の取り扱い訓練だとか救急法の講習だとかをやっていこうということになります。このようなことが、地域の防災組織のスキルアップにつながっていきます。

災害は防ごうと思っても防げませんので、自分自身や地域がどうしたらいいのかを考え、話し合って実行していくことが大切です。

以上で終わりにさせていただきます。ありがとうございました。